

悪堕ちヒロインに堕とされる2

―ふたなり怪人に逆アナルでNTR調教ビデオを撮られる話―

プロローグ

「ウェーイw 後輩ちゃん見てるー？ w w w 後輩ちゃん？」

「今からアナタの大切な先輩のー、アナル処女を奪っちゃいまーす♡」

「センパイは正義の戦隊のリーダー『蒼刃』として活躍してみたいだけど、このたび、めでたくも悪の組織に捕まっちゃったって、わけ」

「くすすつ、センパイもとんだドジ踏んじやったね」

「組織に身も心も改造された、このアタシー、『ふたなり洗脳怪人・マラピーチ』の力をちよっち、あなどってたみたいだね♪」

「せっかくだから捕まえたセンパイを、このマラピーチちゃんが、逆アナル調教、してあげちゃいまーす♡」

「もちろん、その様子はぜーんぶビデオに撮って、送るからみんなに見てもらえると思うよ」

「アタシだって、コードネーム『雪華』として、みんなと一緒に戦ってたんだし。センパイが堕ちていく素敵な姿、独り占めになってしないって♪」

「センパイが調教されて、立派なメスに堕ちていく様子をみんなで、いーっぱい共有して、最高に楽しんじやおうよ♡」

「ね、画面の向こうの後輩ちゃんに、他の正義の味方のみんな♪」

「それに……アタシ、やーつとセンパイのこと、独り占めできるってカンジ♡」

「アタシのほうが先にセンパイと知り合ったのに、後から入ってきた後輩ちゃんと仲良くなっちゃって、なーんか、うまいことやっちゃってさ」

「昔は、センパイと後輩ちゃんのこと、応援しなきゃーなんて、いい子ちゃんみたいなこと思ってたけど、でも、そーいうの、全部なし♡」

「アタシは、昔の『雪華』じゃないよ。組織に改造された怪人で、女幹部『マラピーチ』ちゃんなんだから昔みたいにい子ぶって我慢したり、譲ったりしなくてもいいし♪」

「素敵に生まれ変わって、授かった怪人の力でセンパイのアナルをたっぷり開発して、堕としてあげまーす♡」

「後輩ちゃんは大好きなリーダーが、元仲間のアタシに堕とされるところ、オナネタにしちゃうのかな？」

「後輩ちゃん、いつも純真ぶってそういうことに興味ないってアピールしてたけど、ムッ
ツリスケべだって知ってるんだよ♡」

「くふふ、センパイとのエッチなビデオ、沢山送りつけちゃうから、期待して待って♡」

「じゃ、今日は第一回目ってことでセンパイのアナルをたーつぷりと、開発しまーす」

「あ、ビデオはそのままで、よ・ろ・し・く・♪」

シーン1

「はい、マラピーちゃんだよ♪」

「アタシ、組織に改造されて、怪人にももらったわけだけど、モラルとか、周りの目とか、そーいうの一切、気にならなくなって、最高の気分」

「みんなも改造してもらって、アタシと同じになればいいのにー♡」

「まずはセンパイに洗脳改造の素晴らしさを教えてあげまーす♡」

「ほらこれ、見て見て♡」

「組織の人につけてもらった、アタシの新しい武器、極太ふたなりちんぽ♡ 決まってるでしょー、これで先輩のアナルを調教・し・て・あ・げ・る♡」

「センパイは『蒼刃』として戦隊のみんなを引っ張ってきたわけだし、アナルとか、初体験だと思うけど、お尻の穴、オチンポでかき混ぜられると、本当に気持ちいいんだよね♡」

「射精するのと違って、何回でも無限にイケちゃうんだから」

「もう、元に戻れなくなっちゃうかも♡」

「あれえ、そんな絶望的な顔して、こっち見てほしくないな。アタシがすっごく悪いことしてるみたい。くふふっ♪」

「センパイにこの世で一番、気持ちいいこと教えてあげてるだけなのにーそれに、アタシもセンパイのアナルを楽しむにしちゃってる」

「期待しすぎて、オチンポびっきびきに勃起してえ♡ 先っぽからトロトロにカウパー溢れまくって、すごすぎじゃない？」

「ちゃんと精液も作れるし、精力だって絶倫♡ センパイをすっかりメスに墮としてあげられるよ♡」

「あ、もうッ、暴れちゃダメっ」

「こら、センパイ、ちょっと大人しくしなさい。飼い犬みたいに四つん這いのまま、鎖で両手両足繋いで、動けなくしちゃってるんだから。抵抗しても、ムダだってば♡」

「センパイの手足を繋いでる鎖は、特別に強化してあるから、いくら戦隊リーダーの『蒼刃』の力でも、簡単には切れないよ」

「大丈夫、安心して。あとでセンパイを洗脳処理して、アナル調教で悦んじゃう身体にすっかり変えてあげるから。くすす」

「それに、センパイだって、アタシのふたなりチンポ、少しは気になってるんだよね」

「センパイの視線、アタシの勃起チンポをガン見しすぎだし♡」

「ひょっとして、もうお尻の穴とかムズムズしちゃってる？」

「だめだめ、ワンちゃんみたいに四つん這いでそんなこといわれてもー？」

「ね、カメラの向こうのみんなも呆れてるよ。抵抗しても、ムダだってば。センパイの意思の強靱さは知ってるけどそれだけじゃ、どうにもならないよね」

「大人しくして、四つん這いのまま、アナルで気持ちよくなるッ♪ 昔のアタシ、『雪華』も最初は無駄な抵抗を続けてたんだけどお、結局、快楽に負けちゃって、こーんなドスケベなふたなり怪人になっちゃったの」

「ああ、センパイも『雪華』にそっくりな目。だーいじょうぶ。アタシがしっかり調教してあげて、フタナリチンポのことしか考えられない、かわいい穴奴隷にし、て、あ、げ、る」

「それじゃ、センパイは四つん這いのまま。アタシのチンポを見せてあげるね」

「ほら、アタシのガチガチふたなりちんぽ、見て。先輩のーアナルを犯せるって思うと昨日からずっと楽しみで……ん♡」

「おちんぼ、顔に押し付けるの。屈服、させてる感じがすごーいドキドキでーえ♡ ほらあ、先輩♡ 顔、逃げちゃ、ダメ。そらしても無駄だよ、んふ、んふう♡」

「アタシの匂い、たっぷりと擦りつけちゃうね♡ マーキング♡ マーキング♡」

「んう、んうう、センパイの顔、アタシの先走りで、ねとねと♡ 糸も引いちゃって、匂いもエッチだよね？」

「先走りのおツユでもっとドロドロにしてほしかったり？」

「じゃ、ふたなりチンポの匂い嗅いでえ♡ すくはくって、深呼吸♡ 肺をふたなりチンポの匂いで満たして濃いオチンポジュースの匂いで、だんだん目がとろんて、してきた」

「んふ、だんだんと素直になってきたね、センパイ」

「ほらあ、もっと嗅いで」
「ふたなりチンポ怪人のカウパーにドハマリして♡ 吸ってく吐いてく、肺の奥にオチンポの香りを刻んじゃって♪」

「これがふたなりチンポの甘い匂い♪ 脳に覚えこませちゃって♡ クセになっちゃったら、この匂いなしではいられないよ」

「正義の味方『蒼刃』がふたなりチンポの匂いで、はあはあしちゃうなんて、本当に最高♪ じゃあ、そのまま四つん這いのまま」

「アタシはセンパイの脇に回って、お尻の中まで、たっぷりのローションでほぐしてあげる」

「ふたなりチンポの我慢汁みたいにぬちよぬちよのローション」

「それじゃ、お尻にぬくりぬり、していくよ♡」

「ローションを少し塗っただけで、お尻の穴が震えて、悦んじゃってる。このまま、もっと塗りつけて、お尻の谷間も、穴もローションまみれだね」

「ほら、抵抗しても一緒だよ」

「うん、そう、大人しくして、このままアナルの中にも塗りこんでいくよ」

「アタシの人指し指にたっぷりと絡めて、ずぶぶぶって、入れてえ♡」

「指が肛門にずっぽりと入ってるの、わかるよね。もう、黙ったままなんて、ずるいよ。ちゃんと答えてよお」

「じゃ、ゆっくりと、抜き挿しするね。ずるるって、抜いて♡ 今度は入れて♡」

「抜いて、入れて♡ どんどん早くしていくよ」

「はあ、はあ！……ん♡ ん♡」

「指先をずっぽらずぽ、ずっぽらずぽ♡」

「どんな感じかな？ だんだん、良くなってきた？」

「うーん、まだダメかあ」

「荒く息をして、顔も赤くなって、感じてるみたいなのに。まだ、不快な感じなんだ♡ そんなに頑張らなくてもいいのに」

「でも、仲間のみんなも、後輩ちゃんも見てるから、仕方ないよね。正義のリーダーのプライドってヤツもあるしね♡」

「じゃ、指をずぶううゝうって、もつと奥に突きこんで、指を鉤爪みたいにぐいってまげて、お腹の側をぐりぐりしちゃうよ。そう、前立腺ってヤツ、ここが気持ちいいんだって♡」

「ほら、指先で押すみたいに、ごーりごり♡ ごーりごり♡ 我慢しないで、気持ち良かったら声、出していいんだよ」

「激しくしていっちゃうよ♡ ごりり、ごりり♡ れ、さっきの威勢はドコへ行ったの？」

「ね、黙ったまんまなんだ♡」

「それじゃ、センパイがお話しちゃんとできるように前立腺をこのままゴリゴリしながら♡ お耳も責めちゃいまゝす」

「センパイを後ろから抱くように身体を押しつけてお尻と耳を同時に責められるよね♡」

「まずは左のお耳から」

「あ、避けようとしても、無駄♡ こうしてアナルを中から、ぐりりって擦ったらもう抵抗できないってカンジ？」

「それじゃ、センパイのお耳、んじゅ、じゅる。つゆだくで舐めてくよ♡」

「耳の周りをれる、れるッ♡ ちょっとビクってしたね。お尻だけじゃなくて、耳も感度いいみたい♡」

「はむッ、耳の外側を唇でくわえて、あくむあむ、あむあむッ。センパイのお耳柔らかくて、可愛い♡」

「アタシも興奮してきちゃった」

「舌をじゆる、じゆるりッ、お耳の中に這わせて、んれろ、れる。耳を舐められてるのに、アナルまで反応してるー。もつと奥へ♡ んぢゅぶッ、ぢゅぶぶッ♡」

「黙ってても、気持ちいいんだ。息も激しくなって、身体が震えてる♡ んぢゅぶ、ぢゅぶ♡ ああ、センパイのこと早く堕としたい♡」

「じゃあ、今度は右のお耳だね。あ、今度は逃げたりしないんだ。もうお耳舐められるの、楽しみなっちゃってたり?」

「言い訳しても、だくめ♡ じゃ、いくよ♡」

「右も、もちろんエッチなおツユたっぷりで舐めなめしてあげちゃうし♡ 耳の外から、れろお、れろれるッ♡」

「あ、もうビクってしない♡ お耳舐め、普通になってる♡ じゃあ、もう少し右は激しくないで、だよね♡」

「お耳の外から、あむう、くわえこんねえ……甘くわえしちゃうね。あくむあむ、あむッ♡ 正義の味方さんも、お耳はやわやわしてて、女の子みたい」

「もつと、あむあむッ、してあげる。んちゅ、ちゅばッ♡ じゃ、舌をぢゆる、ぢゆるるッ、お耳の奥に進めて♡ んれる、れろろッ♡」

「耳の穴をかき混ぜるね。ぢゅぶじゅぶ、んちゅぶぢゅぶッ♡ ずっぽり入ったアタシの指を、お尻が締めつけてきて、耳舐めで、お尻の穴が反応しちゃってる」

「認めちゃったら、ラクになれるよ」

「んちゅ、ちゅばちゅば、お耳舐め舐めも、アナルずぼずぼも、最高に気持ち良くなれちゃうんだよ」

「もつと奥まで♡ んじゅぶ、ぢゅぶぢゅぶ♡ どんどんよくなって、エッチな声、出しでもいいんですよ♡ ふはぁ……センパイ、頑張りすぎー」

「それじゃ、強情張るセンパイを今からアタシのデカチンポで、いっぱい犯してあげちゃう♡ 指だって、抜いたり入れたり」

「すっごくスムーズに動くようになってるもんね。ふたなりチンポだって、呑みこめちゃうよね。くすす♡ アタシも、先っぽからカウパー、だらだら溢れて、もう我慢できない」

「このままセンパイの、尻穴ヴァージンもらっちゃいまっすっ」

「はあ、はあっ♡……はあ、ふあっ……硬くなった先っぽをお尻の穴へあてがって。んん♡」

「うふっ♡ 先輩のアナル、こりこりっ♡ 固くしちゃってカワイイ♡ あたしも初めての
のアナルのときは怖くて震えて懐かしいな」

「指とチンポは全然、違うよねー♡ でも、大丈夫♡ あたしもお尻をいじめてもらって、
イかせてもらったからー、せ、ん、ぱ、い、も絶対気持ちよく墮としてあげる♪」

「ガチガチのチンポ先がお尻の穴にぐいぐい当たってるの、わかるよね♡」

「はやく、堕ちちゃえば、ラクになれるよ。アタシのふたなりチンポでずぼずぼされる悦
びを、身体中で味わえるんだよ♡」

「そっちのがおトクだし、気持ち良いし♡」

「変なプライド捨てて、早く堕ちちゃえ♡ チンポ狂いになっちゃえ♡ 身体をラクにし
て、ほら、入れるよ。お尻の奥に、んう、んううッ♡」

「アタシのオチンポ、挿入だよお、んふう……♡」

「もっと奥へ入れてるよ♡ ほらリラックス♡ 息を吐きながら、ぶっといチンポに身体
の内側から広げられて、変えられていく感じ、たっぷりと楽しんで♡ ん、んん♡」

「これがセンパイのメス穴人間への第一歩だよ、改造されてー、洗脳してもらったらー、
もう正義のことなんて、考えなくていいんだよ」

「あはっ♡ あはっ♡ 奥まで入っちゃった」

「センパイのお尻、ぎゅっぎゅってアタシのふたなりちんぽ締め付けて、だめですよー？
もっと抵抗してくれないと、アタシー、怪人なんですからあ♡」

「センパイは正義の味方で、みんなも見てるわけだし、すぐ堕ちちゃったら、つまらない
んですけどー♡」

「頑張れセンパイ♡ このまま、動いちゃうよ♡ んほっ♡ んおっ♡ お尻の中、完全
開通して、先輩のアナル処女もらっちゃった♡」

「このまま奥まで入れてー、ん♡ 引き出してー♡ どうですかあー？ 感じてくれちゃ
ってますー？」

「……あは、そうでしたー♡ これぐらいでは屈する、ヤワなセンパイじゃなかったかも
♡ じゃあ、もっとピストン速くするし♡」

「んふ、んおッ♡ これで、どうですかあ♡ おふ、おふ♡ どんどん、激しくいっちゃ
うよお♡ んうッ♡ センパイ息乱れて、我慢してるの丸見え♡ ん、んう♡」

「ほら、いやらしくメス声出して、よがって♡ ああ、ダメ……センパイのお尻の中、気
持ち良すぎだし♡」

「あ、んあ♡!!……フウ、フッ……ん♡ んん♡ ふあっ♡!!……ハアッ、ハアッ♡!!
ふあッ♡♡!!……ん！ ふう♡！ ふうっ♡!! 中にたっぷりとザーメン、ぶちまけちゃ
うから♡」

「中出しされたら、心は折れてなくても、もうセンパイの身体はメスになっちゃいますよ
ねー♡ んううッ、いちばん奥で出してあげる♡」

「これでセンパイもふたなりチンポ用のメス穴だし♡」

「んっうーッ♡」

「あ、あ、センパイの中に好きなだけ出させてえマジ最高すぎい……」

「それじゃオチンポ、抜いちゃうよ」

「オチンポで開ききったメス穴からもたくさんザーメンが逆流して……ホント、エッチす
ぎだし」

「あふ……昂ぶって、アタシのふたなりチンポ。勃起してきちゃって……手が勝手にオチ
ンポ、抜いちゃう♡」

「はあ、はあ、はあ、はあっ♡……フー、フッ♡……ん♡ んん♡♡、……ハアッ、ハ
アッ♡……ふあッ♡ ん、んう……このままセンパイの身体にザーメン！」

「たっぷりとぶっかけしちゃうしッ♡ く、くううーッ♡ あうう、精液い、チンポか
ら溢れて止まらないい♡」

「はう……っふあ、んんっ♡」

「センパイの身体も、アタシの身体も、チンポ射精でドロドロだし♡ でも、これでセン
パイもアタシの匂い、完全に身体に染みついたね♡」

「これが、センパイのご主人様の匂いだよ。ちゃんど覚えましてー？」

「あーあ、元仲間にアナル奪われて、ふたなりザーメンぶっかけられて超惨めなのにそれ
で、おちんちん勃起させてるなんて……」

「ぶー、くすくす、センパイ、ドMの素質ありなんですよけどー」

「ウェーイ、見てるー？ チームのみんな。これから、もっとセンパイのドスケベ映像
送ってあげるからオナネタ期待して待っててねー♡」

「それじゃ後輩ちゃん、みんな。ばいばい♪」